置るなり、

〔日本書紀十四雄略〕二年十月丙子、天皇見采女○倭采女日媛面貌端麗、形容温雅、乃和顔悅色曰、朕豈不欲視汝妍笑、

〔萬葉集四相聞〕大伴宿禰家持贈娘子歌七首○六首略

不念爾、妹之咲儛乎、夢見而、心中ニ燎管曾呼留、

〔水鏡下淳仁〕天平寶字二年八月廿五日、仲丸大保になりにき、○中略もとの藤原の姓にゑみといふ二もじをくはへたまはせき、これらもみな、太上天皇○孝謙の御おぼえならびなくて、せさせ給ひしなり、ゑみといふ姓も、御らんずるたびに、ゑましくおぼすとて、たまはすとぞ申あひたりし、

〔源氏物語二十二玉蔓〕たゞこれをすぐれたりとはきこゆべきなめりかしと、うちゑみてみ奉れば、おい人もうれしと思ふ、

〔源氏物語四十七角總〕女ばら日比うちつぶやきつる名殘なく、ゑみさかへつゝ、おましひきつくろひなどす、

〔今物語〕或者所の前を春の頃、修行者のふしぎなるがとをりけるが、ひがさに梅のはなを一枝さしたりけるを、兒ども法師など、あまた有けるが、世におかしげにおもひて、あるちごの梅の花笠きたる御房よといひて、笑ひたりければ、此修行者立かへりて、袖をかきあはせて、ゑみ〳〵とわらひて、

身のうさのかくれざりけるものゆへに梅の花がさきたる御房よと仰られ候やらんと、いひたりければ、この者ども、こはいかにと、おもはずに思ひて、いひやりたるかたもなくてぞ有ける、さうなく人を笑ふ事あるべくもなきことにや、

〔新撰字鏡口〕嘕市暑反、喜咲不自勝也、太加惠